

西洋の巨匠で飾られた南米の美の殿堂 チリ国立美術館

ふじかわ さとし
藤川 哲 山口大学准教授

国際美術展「トリエンナル・デ・チリ 2009」入り口



南米でもっとも古い国立美術館

チリの首都サンティアゴまでは、飛行機で約二七時間。成田を夕方七時に発って、翌朝一〇時ごろアルトゥロ・メリノ・ベニテス国際空港に到着した。

チリ国立美術館は、一八八〇年に設立された南米でもっとも古い国立美術館である。旧市街中心部にあり「サンタ・ルシアの丘」の北側に位置し、所蔵品は約三〇〇〇〇点にのぼる。チリ建国一〇〇年を記念して一九一〇年に建てられた同館の建物は、フランスに学んだチリの建築家エミル・ヘキエによる新古典主義様式で中央に吹き抜けのホールをもち、鉄とガラスでできたドーム状の天井採光部が印象的だ。

トリエンナル・デ・チリ二〇〇九

筆者が同館を訪ねたのは二〇〇九年一月のことである。二〇一〇年の建国二〇〇年記念に向けた先行事業として、今後三年毎に開催していく国際美術展「トリエンナル・デ・チリ二〇〇九」の第一回展の会場になったためである。

同展は、サンティアゴのみならず、

イキケ、バルパライソ、コンセプシオンなど南北に長い同国の七都市の文化施設で一斉に開催される国家的規模の事業だった。

チリ国立美術館では、トリエンナルの企画展「国家の領土——一九世紀チリの風景画と地図製作」のほかに、米国で活躍したゴードン・マッターハクラーク（チリを代表する画家ロベルト・マッタの息子）の回顧展や、地元サンティアゴで活躍するファン・パブロ・ラングロイスの一九六九年の作品《柔らかな物体》の再現展示などがおこなわれていた。「国家の領土」展は、一九一〇年までに描かれた風景画、水彩スケッチ、地図、地理



ファン・パブロ・ラングロイス《柔らかな物体》

学書を展示し、「国土のイメージ」の形成史を振り返る内容だった。現代美術家のアリシア・ビラリールによる、小学生用の机を並べたインスタレーションも展示されていた。

金地モザイクの美術家たち

同館の正面には、金地モザイクによって六名の美術家の肖像が再現されている。ラファエロ、レオナルド、ブラクシテレス、フィディアス、レンブラント、ジャン・ゲージョンである。同じ南米でも一九六九年完成のサンパウロ美術館は、展示室を中空に浮かせるモダンなデザインで、こうした装飾をもたない。他方、南半球では、シドニーのニュー・サウス・ウェールズ州立美術館の外壁に、ドナテッロやルーベンスらの名前とともに、「ブラクシテレスの前でポーズをするフリユネ」などの浮彫りが埋め込まれている。同館の建物は一八九七年の完成。その後の一〇〇年で西洋美術史に対する理解は深まり、権威も相対化されて、こうした装飾に対しても適切な距離がとれるようになったといえるのではないだろうか。